International Cooperation Center for Agricultural Education, Nagoya University

ICCAE news

No.17 2010. 4. 1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成22年4月1日発行 第10巻 第2号(年2回発行;通巻17号)

発 行／名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第10回オープンフォーラム「国際協力に対する大学の貢献のあり方：戦略的参加にむけて―農学知的支援ネットワークの設立―」を開催

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、文部科学省と共催で、第10回オープンフォーラムを、台風のため当初の予定を延期し、2009年11月30日、名古屋大学野依記念学術交流館で開催しました。昨年の第9回オープンフォーラムで提案した農学知的支援ネットワークの正式な発足に向け、その周知を図り、具体的な取り組みの可能性や大学間連携の問題点などについて議論することを目的としました。

冒頭、名古屋大学の杉山寛行副総長・理事と文部科学省・浅井孝司国際協力政策室長よりそれぞれご挨拶をいただき、ICCAEの山内章センター長が開催趣旨を説明。基調講演では、持続的開発のための農林水産国際研究フォーラム（J-FARD）の東久雄会長が、我が国が果たしてきた農業・農村開発分野における国際貢献を振り返り、大学及び研究機関による人材育成や研究協力の役割が今後ますます重要になってくることを協調されました。

セッション１では、ネットワークの目ざすものとして、ICCAE・浅沼修一教授と槇原大悟准教授からそれぞれネットワークの組織と運営体制及びICCAEと九州大学の協働による我が国の国際協力の援助リソースと海外の支援ニーズの調査及びマッチング結果が報告されました。セッション２では、海外ニーズ調査と案件形成の取り組みとして、名古屋大学・中野秀雄教授がインドネシアでのマラリア感染症の事例について、また、筑波大学・平野僚子博士研究員/渡邉和男教授がミャンマーでの生物資源の事例について報告され、相手国の十分な状況把握と相手機関との信頼関係の重要性が指摘されました。セッション３では、科学技術振興機構・粂田真宏調査役、日本学術振興会・長谷川博之プロジェクトマネージャー、JICA・小原基文農村開発部長及び農林水産省・鈴木亮太郎課長からそれぞれ大学が貢献できるあるいは大学に期待されている科学技術国際協力の様々な制度・事業の紹介がありました。セッション４では、中部学院大学・竹ノ下祐二准教授／京都大学・山極寿一教授、九州大学・緒方一夫教授及び東海大学・石川智士准教授から、これまでに実施した国際共同研究・国際協力の経験から、大学のもつ多面的な協力の可能性やそれを中心になって引っ張るコーディネータの役割が非常に重要であることが説明されました。５名のパネリストによるディスカッションでは、大学への期待、大学間連携の課題と大学の事務部局による国際協力現場の理解の重要性などが議論されました。

本フォーラムで、我が国の大学や研究機関が有する知的資源は多様で、今後の科学技術国際協力への参加の期待も大きいこと、その一方で、国際協力の目的の明確化や相手国との相互理解の重要性さらには国際協力における大学間連携の仕組みの構築などの課題も指摘され、今後のネットワークの取り組みが重要であることが広く認識されました。

（浅沼修一）

パネル・ディスカッション

農学知的支援ネットワーク(JISNAS) の設立

これまでICCAEにより、大学や研究機関等が有する知的資源を組織的、継続的に活用し、科学技術ODAや国際協力等に積極的に貢献できる体制の確立を目的とした活動が行われてきました。その活動の中で、2009年11月30日に、全国の大学や研究機関および文部科学省、農林水産省、国際協力機構（JICA）及び国際農林水産業研究センター（JIRCAS）の参加を得て名古屋大学で農学知的支援ネットワーク（JISNAS=Japan Intellectual Support System in Agricultural Sciences）の設立総会が開催され、会則、組織運営体制が決定され、正式な設立に至りました。全国の大学から９名の運営委員が選出され、互選を経て、田中耕司京都大学教授が運営委員長に指名され、ICCAEは事務局を引き受けることとなりました。また、文科省、農水省、JICA及びJIRCASはアドバイザー機関として参加していただくことになりました。すでにホームページ（http//jisnas.com/）を開設し、現在、プロモーションと会員獲得のため全国の大学訪問を行っています。ICCAEは事務局としての責任の重大さを強く自覚し、活動を支援していきます。（浅沼修一）

設立総会における田中耕司運営委員長の挨拶

愛知県農業総合試験場、JKUAT、マセノ大学と共同研究契約を締結

ICCAEは、東アフリカにおける稲作振興のための研究推進に向けて、2009年度に愛知県農業総合試験場、およびケニアのジョモケニヤッタ農工大学（JKUAT）とマセノ大学との間で共同研究契約を締結しました。東アフリカ・ケニアの高原地帯における稲作で問題となっている雨季の気温低下に伴う冷害といもち病の発生に対処するため、愛知県農業総合試験場山間農業研究所と共同で、耐冷性およびいもち病抵抗性のイネ品種育成に向けた新規遺伝子マーカーの開発と遺伝子マーカー育種に取り組みます。JKUATおよびマセノ大学との共同研究では、耐冷性、いもち病抵抗性および耐旱性イネ品種の現地適応性評価、現地に適したイネ品種が持つべき形質の特定、および生育阻害要因を克服するための栽培技術の確立に取り組みます。（槇原大悟）

ICCAEと愛知県農業総合試験場との共同研究の成果を発表

平成21年12月17日に愛知県農業総合試験場で開催された、名古屋大学大学院生命農学研究科と同試験場との研究交流会において、ICCAEが、生命農学研究科、同試験場と進めている共同研究の成果について、研究チームの一員である生命農学研究科の犬飼義明氏が発表しました。同試験場とは平成20年度より、「環境ストレスに関する稲遺伝資源の評価」という課題のもとで共同研究を進めています。

また、東アフリカの稲作振興を目指している、平成21年度科学技術振興調整費「国際共同研究の推進」（研究課題名：東アフリカ稲作振興のための課題解決型研究）による共同研究も進めており、今回の発表は、それらの成果の一部をまとめたものです。同試験場は、いもち病に関して世界トップクラスの研究成果を有し、ICCAEとの共同研究の進展によって、その成果がアフリカ稲作振興に活かされ、またそれが愛知県の農業研究にもフィードバックされることが期待されます。（山内　章）

名大農学部・王立農業大学カンボジア海外実地研修を農国センターがサポート

資源生物学科３年生を対象に平成21年11月19日から26日に海外実地研修を実施しました。研修では、カンボジア王立農業大学の３年生とともに、カンボジアの農村で農業や生活の調査を行いました。ICCAEの伊藤香純、槇原大悟准教授に、山内章センター長も加わって、農学部から３名の教員とともに、11名の学生を引率しました。王立農業大学からも12名の学生が参加し、３名の教員が指導に当たりました。

最終日には、副学長、学部長を始めとする教職員や多くの学生の参加のもと、両大学の参加学生による成果発表会と修了式を行い、地元のテレビや新聞等にもその模様が報道されました。

王立農業大学に対しては、ICCAEを中心に平成12年より、大学院強化支援や共同研究を実施し、また一昨年には、ICCAEの支援のもとに生命農学研究科との間に、「学術交流に関する協定」と「学生交換に関する覚書」を締結してきて、これらの成果を踏まえて、この研修が実現しました。（山内　章）

着 任 挨 拶

前多敬一郎　プロジェクト開発研究領域　教授

2010年4月1日付でプロジェクト開発研究領域の教授に着任いたしました。これまで名古屋大学大学院生命農学研究科において畜産学の専門家として家畜の繁殖の研究を行ってきましたが、その経験や人的ネットワークを生かし、本センターのミッションを遂行したいと思っています。本センターにはこれまでも留学生の教育や国際共同研究などで、いろいろとお世話になってきましたが、本センターへの移籍を機に、畜産・獣医の分野での農学教育の国際化に力を尽くして行かなければならない立場であるとの意を強くしています。教育の国際化のひとつの役割は、人的資源の効率的な活用であると思っています。各国に散らばる優秀な人々の力をさまざまな国の教育に生かしていかなければなりません。ウェブベースのコース管理システムなどを用い、大きな教育のネットワークができればと考えています。また、畜産や獣医学分野の国際的に共通した課題に取り組めるような人材育成も目指したいと思います。

略歴　1950年生れ。1980年東京大学農学部畜産獣医学科卒業、獣医師免許取得。1985年東京大学大学院農学系研究科博士課程を修了（農学博士取得）、名古屋大学農学部助手に採用される。同講師（留学生担当）、助教授、教授（生殖科学研究分野）などを経て、2010年4月より現職。

退 任 挨 拶

松 本 哲 男　プロジェクト開発研究領域　教授

センター設立半年後の1999年10月16日に教授として赴任して以来、10年余の間、とてつもなく忙しく、また楽しく過ごさせていただきました。

ICCAEは生命農学研究科の二本の柱の一つである「世界の現場で農学・農業に貢献すること」を担う目的で設立されました。しかしこの理念は必ずしも研究科の共通認識とは言えず、対外的にも認知は極めて低い状況でした。そのため、ICCAEの「存在感」を打ち立てるのが急務でした。そこで、ICCAEを「設立後3年間で、農学分野の人づくり協力に関わるナショナル・センターとして市民権を確保する。設立後5年間で、インターナショナル・センターとしての認知を国内外の大学や国際機関から得る。」という中期構想を立てました。今、ICCAEは「確かな存在感」を国内外に示しています。

私は当初アフリカも担当していましたが、浅沼先生が赴任された後は、インドシナ半島諸国特にカンボジアに集中し、王立農業大学の教育改革、大学院設立を支援してきました。その時の愛弟子、ヴィサルソック・タッチ氏が2008年新設されたカンボジア初の総合大学、バッタンバン大学の学長に抜擢されたことは実にうれしい事でした。2006年から農村での酒造りによる農産物加工振興にも取り組みました。お酒も昨年12月に販売のめどがつき、私の卒業に間に合うことができました。

今、ICCAEの全教員が開発教育・研究に力を注いでいます。当たり前のことですが、とても大切なことです。この姿勢を強化・発展させ、生命農学研究科と協力して現場の課題を解決できる人材育成に取り組めば、ICCAEはその使命を必ず達成できるものと確信しております。

離 任 挨 拶

花 里 信 彦　国際協力機構アフガニスタン事務所所長
客員教授（2009年4月2日～2010年3月31日）

大学の国際協力への積極的な参加、またODAの実施機関との効果的な連携手法の研究のための1年間の客員教授業務を3月にて満了します。特任教授として名大在任中の2008年に、大学の総合的な知識・経験・能力を効果的に活用すべく農学知的支援ネットワークの発足を企画・立案しました。文部科学省やJICAの理解も得てようやく2009年の11月にネットワークが設立され、活動を開始しようとしています。

客員教授の任期途中でアフガニスタンに赴任することになり皆様にご迷惑をおかけしましたが、12月と3月のオープンセミナーでは沢山の先生や学生の皆さんと国際協力の重要性、大学の役割について、熱く議論することができました。

アフガニスタンでも農業・農村開発は主要課題です。食の安全保障や雇用創出、ひいては治安の安定のために地方農村部での農業振興は不可欠ですし、将来を見据えての稲や小麦の育種の研究も今始めなければ間に合いません。これからもより一層の大学関係者の皆さんのご支援を承りたくよろしくお願いいたします。

略歴　1959年生れ。熱帯衛生工学修士：英国リーズ大学大学院。専門：途上地域開発。民間企業、青年海外協力隊、国連ボランティア等を経て、1995年旧国際協力事業団（JICA）入団。無償資金協力調査部、インドネシア事務所、外務省経済協力局開発協力課課長補佐を歴任。2002年にJICA復職後、企画・評価部企画課長代理、総合企画チーム長を経てインドネシア事務所次長。2008年1月より名古屋大学に出向（GCOE特任教授）。2008年12月からJICAに復帰し企画部参事役。2010年1月より現職。

着 任 挨 拶

浅 井 英 利　協力ネットワーク開発研究領域　研究員
（平成21年11月1日～平成22年3月31日）

昨年11月に「東アフリカ稲作振興のための課題解決型研究」で任期付き研究員として採用され、現在はケニア陸稲栽培の生産性改善を目標に現地調査に従事しています。大学院時代には国際イネ研究所のアドバイザーのもとで「ラオス北部での持続的焼畑農業」に取り組んでいました。今でも、イネ研究者である彼の言葉が鮮明に記憶に残っています、「どうしてイネだけにこだわるの?大切なのは農家がハッピーになることだよ」。自分の視野の狭さを痛感しました。国際協力を目的とする本センターを希望したのも、思えばあの一言が始まりです。深い専門性と俯瞰的な視点を兼ね備えた研究者、私が描く理想像に近づけるよう日々努力していきます。

略歴　1980年生れ。2002年、京都大学農学部資源生物学科を卒業。2002年より京都大学大学院農学研究科博士前期・後期課程に在籍。2010年、同大学院にて博士号（農学）取得。専門:作物学・農業生態学。

外国人客員研究員

ネリカ耐冷性の品種間差異の検定とケニア高原地方に適した耐冷性イネ品種の選抜

ピーター・マシンデ　ジョモケニヤッタ農工大学農学部園芸学科上級講師
ICCAE客員研究員（2009年5月7日～11月5日）

私は槇原大悟先生の暖かい出迎えのもと、2009年5月7日に名古屋大学に着任しました。私を客員研究員として招へいして下さった山内章ICCAEセンター長に感謝致します。

ICCAE滞在中、浅沼修一、北野英己、槇原大悟、犬飼義明先生方から多大な支援を受けました。彼らは忙しい中、時間を割いて、私の研究を円滑に進めるのを指導して下さり、私の研究生活を思い出多いものにして下さいました。北野先生との東郷フィールドでの仕事は大変貴重なもので、イネの研究に関する私の見識を深めることができました。またICCAE事務室の皆さんにも感謝しております。中嶋、水上、坂先生をはじめ愛知県農業総合試験場山間農業研究所のスタッフの皆様には研究活動の支援と、イネの育種、いもち病の評価について大変重要な技術を教えて下さり感謝致します。中嶋先生のおかげで、山間での研究は大変楽しいものとなりました。

略歴　1970年ケニア生れ。ジョモケニヤッタ農工大学農学部園芸学科卒業後、同学科ティーチング・アシスタントならびに助講師として勤務。1998年ナイロビ大学農学部園芸学科修士課程を修了し、ドイツ・ハノーバー大学博士課程にて2003年博士号（園芸学）を取得。2005年岡山大学客員研究員。2003年12月より現職。

カンボジアにおける酒造りの品質管理手法とマーケティング、サプライチェインに関する研究

チャイ・チム　カンボジア王立農業大学（RUA）大学院研究助手
ICCAE客員研究員（20010年1月5日～3月31日）

ICCAEでは、酒工場の工程管理を視察することによって、酒の品質管理と付加価値についてより深い理解を得ることができました。またカンボジアにおけるマーケティングやサプライチェインの構築方法を研究しました。この経験をカンボジアでの農産物加工産業の振興に活かし、またRUAのカリキュラムに取り入れたいと考えています。RUAには学生が実習を行えるように品質管理をテストできる蒸留装置が設置されています。これはRUAの学生だけでなく、農民の米酒による収入向上に寄与し、カンボジアにおける農産物加工産業の振興に貢献すると思います。

私を招へいしてくださったICCAEのスタッフを始めすべての人々、特に松本教授と伊藤准教授に感謝の意を表します。

略歴　1983年カンボジア、コムポン・トム州生れ。2006年RUA農業産業学科卒業、2009年にRUA大学院農業・農村開発科農学専攻修士課程修了。現職:RUA大学院研究助手。

オープンセミナー（2009年8月～2009年12月）

回　数	日　時	テ ー マ	講　　師	所　　属
2009年度 4 回	8月18日	アフリカサバンナで野生動物と家畜が共存できるか?―ケニアの乾燥地における住民、健全な生態系および生物多様性の共存に向けて―	水谷　文美 氏	ロンドン大学人類学部客員研究員
5 回	11月 4 日	ネリカ耐冷性の品種間差異の検定とケニア高原地方に適した耐冷性イネ品種の選抜	ピーター・マシンデ 氏	ジョモケニヤッタ農工大学上級講師（ケニア）／ICCAE客員研究員
6 回	12月25日	JICA事業における大学連携の可能性	花里　信彦 氏	国際協力機構企画部参事役／ICCAE客員教授